

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River



熱

帯魚を観賞用として家庭や事務所などに飼育してある所は以前から良く見かけますが、最近では近くの川にいる淡水魚を養っている人も多いようです。ハエやシビンチャなども水槽に入れて横から見ると実にきれいな模様をしています。前の号にも書きましたがカワドジョウなど美しい柄をしています。今は個体数が減ったので重宝がられて飼育されるようになったのだらうと思います。カワドジョウと同じように非常に目立つ柄を持った魚にムツギクがいます。河川工事の後、非常に数が減っていました。最近また増えてきたような気がします。先日水援隊で日平川の魚類の調査を行いました。ムツギクは1尾も確認できませんでした。小さいドンコがたくさんいました。ムツギクは非常に神経質で臆病な人で人が近づくと他の魚より先に石の陰に隠れてしまうので泳いでいる姿はあまり見かけませんが、子どもの頃は石の下から手掴みでよく捕まえた親しみ深い魚です。体の断面が丸く、肉質が多く淡泊でおいしい魚です。塩焼き、唐揚げ、煮付けにできます。大阪では絶滅危惧種に指定されています。コイ目コイ科ムツギク属に分類され、琵琶湖、淀川以西の本州、四国、九州、朝鮮半島に分布しています。河川の中流域や用水路の淀みなど流れの緩やかな所に小さな群れをなして生息し、ト

ビゲラやユスリカの幼虫などの水生昆虫を好んで食べます。石や砂などをつつくようにして食べるのでムツギク(麦突)という名がついたのでしょうか。地方名は菊池川ではスボグチ、スボセなどというし、関西ではクチボソ、トグチ、中国地方ではムギツツキ、イシネブリなどといいます。体長13センチほどに成長し吻端が細く尖って口元から尾びれまで体側を1本の太い黒色の縦帯が通り縦帯の上側(背側)は褐色、腹側は白色と単純ではあるが非常にコントラストのきいた鮮やかなデザインをしているので観賞用としては最適ではないかと思われます。しかし体長が10センチ以上になると体側の黒帯は次第に不鮮明になります。おとなしいので他種魚と同じ水槽で飼うこともできます。ところが、時によつては意外と悪者扱いされることもあります。それは繁殖行動の時に托卵(たくらん)自分の生んだ卵を他の親に育てさせる習性の習性があるからです。水深数10センチの所にオヤニラミやドンコのような自分の卵を保護する性質をもった魚が卵を守っている所を雄1尾と10数尾の雌の集団が取り囲み、隙をねらって自分の卵を産み付けその卵を守らせるといやりかたです。本当の自分の卵はムギツクに食われてしまい、卵が入れ替わったのも知らずに一生懸命守って孵化させる。ここまではムギツクが一方的に悪のようですが、孵化した稚魚はオヤニラミやドンコが

食べてしまうということです。どっちもどっちお互いに相手ということになります。しかしムツギクの托卵の方ばかり誇張されるのでムツギクは悪ということになりがちです。心配なのはどちらも子孫を残せないのではないかとありますが、そこは自然界のルールがあるはずだから心配いりません。托卵の成功率は低いようです。カッコウがホウジロやモズの巢などに托卵するようなもので、そのような習性のおかげで自然の生態系のバランスが保たれているのではないのでしょうか。

7月号広報誌において、シマドジョウを掲載しましたが、その時の写真が昔から食用としてどじょう汁で食していたドジョウの写真の掲載していただきました。訂正してお詫び申し上げます。



歴史調査の楽しみ方

日平城跡23

八 月下旬までに、西側尾根の先端部と堅堀の調査を終えました。現在は、林道寄りの小山Iに移動しています。

山城調査では、飲料水の量が減って、蚊取り線香が不要になり、蟬しぐれが衰退して、秋の到来を知ります。今年もその時期を迎えました。日平城跡で迎えた3度目の夏が去っていきます。

西側尾根の先端部から日平集落へ下る凹道は、3カ所で直角の状態に折れていました。もともと登城道ですから、この様に櫛型の虎口の形になっているのでしょうか。山城では登山道にも注意を払う必要があります。堅堀は小山Aの北東下にあり、小谷に手を入れたものです。谷底と肩部の山腹が造成されています。尾根筋から高低差にして39mも下っていました。そして、北端部に湧水個所があり、それから先が谷川に変化していたのです。

注目すべき個所は岩清水が湧き出す所です。その景観は城時代の水汲み場そのものでした。日平城跡には、毘沙門天を祀る平場の南下に立派な掘り抜き井戸が現存しますが、予備

的な水源を確保することは、不可欠なことでしょう。その意味では大事な場所です。

この堅堀は、西側派生尾根や南西側派生尾根を組み合わせることで、西方向からの攻撃をしっかりと食い止めることができます。

ついでながら堀底からは、腐食が進んだ寛永通寶が見つかりました。4枚目の江戸時代の古銭です。不思議なことに、城時代の古銭は未発見です。前教育委員会の居石裕臣さんがこの様なことを言っていました「蜻浦で聞きましたが、昔は城跡でよく古銭が拾えたそうです」。その古銭はいつの時代のものであったのでしょうか。もし寛永通寶ならば、廃城後の持ち込みになります。そうだとすれば何のためでしょうか。枚数も多いので謎は深まります。

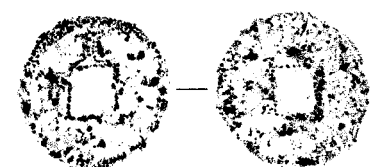
現在は冒頭で述べたように、小山Iの調査に着手しています。南西側派生尾根の東側谷向いです。林道終点の武者溜まりから、山道が通じていますが、雑木や篠芽竹が繁茂していますので、伐採作業が大変です。いよいよ調査に王手がかかりましたので、しっかり頑張りたいと思います。

す。

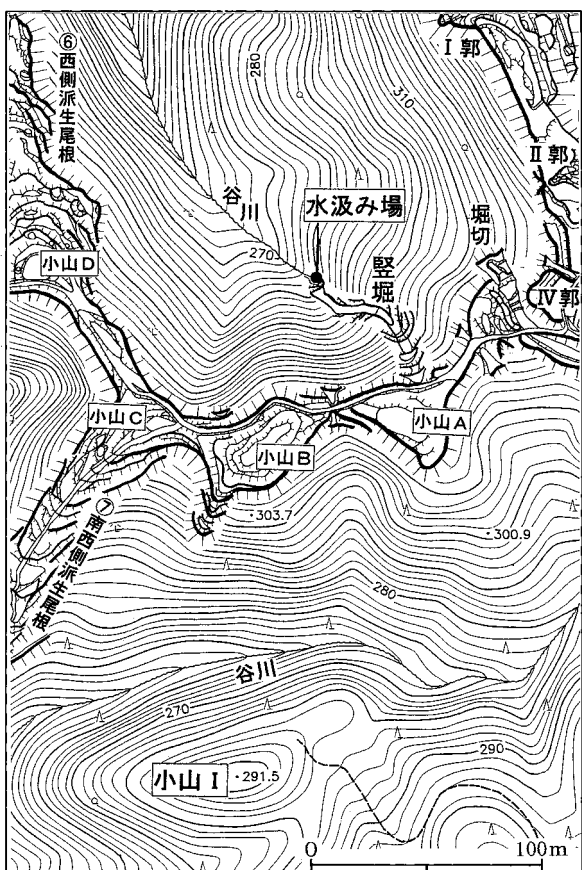
〔雑感〕日平城跡の縄張りは、これまで報告してきましたように、非常に手が込んでいます。ヒトデの形をした複雑な尾根が、最大限に活用されています。それだけに、島津勢の攻撃を受けて、あつという間に落城したことが、不思議でなりません。不意を突かれたために、守備兵が少なかったのでしょうか。でも、城主の小森田氏は、しっかりと城内で戦って、戦死していますから、それはないと思います。城跡に何度も足を運んでいると、この疑問は、益々、強くな

りました。

これから、日平城跡の城下町にあたる蜻浦地区と日平地区の調査も実施します。城跡に関連した地名や、言い伝えを知りたいと思います。皆様のご協力をお願いします。



堅堀から見つかった「寛永通寶」
※腐食が進み「寛」「寶」のみ判読可。



日平城跡・小山A周辺図

大田 幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)